



# 市民参加型の文化イベントでまちを活性化



ほんぼう てるお  
**本坊 輝雄**  
みなみ  
南さつま市長(鹿児島県)



むとう てつひろ  
**武藤 鉄弘**  
みの  
美濃市長(岐阜県)



わだ しんじ  
**和田 慎司**  
こまつ  
小松市長(石川県)



こばやし まこと  
**小林 眞**  
はちのへ  
八戸市長(青森県)

司会・コーディネーター

ほそかわ たまお  
**細川 珠生**

政治ジャーナリスト

交流人口の拡大や地域経済の活性化の起爆剤として注目を集める地域(文化)イベント。地域の文化振興にも大きな役割を担っています。近年は、市民が実行委員やボランティアとして積極的にかわり、大きな成果を上げる事例も増えています。また、東京オリンピック・パラリンピックの文化プログラムに向けて、全国でさまざまな文化イベントが展開されることになっていきます。

座談会ではアートイベントをはじめ、地域文化の振興に寄与するイベントを市民と協働で実施する小林・八戸市長、和田・小松市長、武藤・美濃市長、本坊・南さつま市長にお集まりいただき、市民参加の仕組みや効果、活性化のポイント、今後の展望などについて、幅広くお話しいただきました。

(本文中の役職名・敬称は一部省略しています)

文化活動を行う中で、  
八戸市に誇りを感じる市民を  
増やしたい。そのために、  
文化活動の拠点施設「はっち」  
を整備しました。

小林 眞  
八戸市長(青森県)



地域に根差した文化イベントを  
協働で開催

**細川** 近年、国内だけでなく外国からも、日本の文化に対する関心が高まっています。文化振興はもとより、地域活性化という点でも、地域に根差した文化・芸術をいかに活用するかという視点は重要です。

それでは、各都市が取り組む文化政策の動向やイベントの展開などについてご説明いただきたいと思います。

**小林** 平成17年に市長に就任して以来、私がまちづくりの柱の1つに据えてきたのが文化政策です。市民の多様で特色ある文化活動を「多文化」ととらえ、そうした文化活動のさらなる振興と、地域活力の創出を図る「多文化都市」を標榜してきました。

その環境づくりのために、まず取り組んだのが、八戸ポータルミュージアム「はっち」の整備です。美術館や博物館など、従来型の文化施設とは一線を画し、市民が交流を深めながら、幅広いジャンルの文化活動を行う「場」づくりを目的に、平成23年に市の中心街に開館しました。オープンから5年強が経過しましたが、この間、来場者は500万人を超えたほか、ここを

拠点にさまざまなアートイベントが展開されてきました。

平成17年に合併した南郷地区(旧南郷村)を舞台に、アートで地域の魅力を再発見することを目的とした「南郷アートプロジェクト」はその一例です。地域の小・中学校、自治会、消防団などさまざまな機関を巻き込みながら、映画製作やイベントの開催などを進めてきました。ほかに、

八戸の経済を支える地域の工場の魅力を、クリエイティブな視点で発信する「八戸工場大学」、魅力的な横丁を舞台に、アーティストがさまざまなパフォーマンスを展開する「酔っ払いに愛をくはちのへ横丁月間」など、地域資源を活用したアートイベントが続々と行われています。

**和田** 小松市は、弥生時代の碧玉の玉づくりを起源に、現在に至るまで、ものづくりのまちとして栄えてきた都市。特に、加賀前田家3代利常公が隠居後の1640年に小松城に入城して以降、その城下町である小松は、現在に伝わるさまざまな産業が発展すると同時に、高度な地域文化が形成されていきました。その伝統は今でも小松市に根付いています。

その代表が250年の伝統を誇り、日本三大子供歌舞伎の一つとしても知られる「曳山子供歌舞伎」です。今でも、旧市内の2つの神社の春季例大祭にあたる「お旅まつり」での奉納に向けて、子どもたちは厳しい練習を積み、本番では大人顔負けの演技で観客を魅了します。



幅広いジャンルの文化活動が行われる、八戸ポータルミュージアム「はっち」(八戸市)



市内八基の曳山が一堂に勢揃いする「曳山八基曳揃え」。この曳山を舞台上に子供歌舞伎を上演(小松市)

かった「安宅の関」が市内にあったことにちなんでいます。この縁を生かして、小松市では伝統文化を後世に伝えていこうと、昭和61年から毎年、中学校10校のうち1校が持ち回りで勧進帳を上演しています。

さらに、全国の子供歌舞伎を招いて、地元の小松市子どもたちと共演する機会をつくろうと、平成11年から毎年、5月に「全国子供歌舞伎フェスティバルin小松」を開催、今年で18回を数える恒例行事になりました。

**武藤** 約1300年の歴史がある美濃和紙は、美濃市を代表する文化資源の1つです。一昨年、ユネスコの無形文化遺産にも「本美濃紙」として登録されたことで、ますます注目を集めています。美濃和紙は、元来、障子紙として利用されてきましたが、障子文化が下火になるにつれて、美濃和紙の生産量も減少の一途をたどっていききました。しかし、昭和44年に国の重要無

さらに、小松市は歌舞伎十八番の一つである「勧進帳」のふるさととしても知られていきます。これは、源義経一行が頼朝の追及の手から逃れ、奥州に向かう際に立ちほだ

「ふるさと共創」の精神で、  
健康から文化・スポーツまで  
市民の幸せにつながる  
公益的な事業を  
産学公民一体で推進。



和田 慎司  
小松市長(石川県)

形文化財に指定されたことが転機となり、美濃和紙の文化、伝統を残していこうという機運が市内で高まります。やがてアートの分野で、美濃和紙の需要を掘り起こそうと、平成6年に美濃市制40周年記念事業として「美濃和紙あかりアート展」が開催されました。美濃和紙を使用したあかりのオブジェを全国から公募し、江戸の風情が残る「うだつの上がる町並み」に展示するイベントで、夜になると、和紙の明かりで幻

想的な世界が醸し出されます。今年で23回目を迎え、市民の地道な取り組みにより、今では2日間で10万人を超える来場がある一大イベントになりました。

この「美濃和紙あかりアート展」を含め、日本最大の国際的な自転車レース「ツアー・オブ・ジャパン美濃ステージ」、平成12年からほぼ毎年開催している「市民創作音楽劇」など、市を代表するイベントはどれも市民が企画し、運営や資金調達まで主体的に担っているところに特徴があります。

**本坊** 南さつま市の吹上浜は、鳥取砂丘、九十九里とともに、日本三大砂丘に数えられています。この貴重な資源である美しい砂浜を最大限に生かし、人と自然が調和したイベントを展開したい。そして、地域おこしにつなげたいとの願いから、昭和62年に日本初の砂の彫刻展としてスタートしたのが「吹上浜砂の祭典」です。迫力ある砂像の展示を中心に、音と光のファンタジーや地元物産販売、地域資源を活用した広域イベントなど、魅力ある企画が官民一体となって行われます。

メイン会場に展示される砂像は、海外で活躍するプロのアーティストや、国内の砂像作家、地元有志・小・中学生のものまで、100基以上。延べ約1200人が、およそ3週間かけて、テーマに沿った作品を制作しています。

当初は、まったくの素人の状態でしたが、平成元年に世界一の砂像制作に挑戦した結果、当時では世界最大の17mの砂像づくりに成功。ギネスへの登録を果たすことができました。さらに、平成16年には日本で初めての試みとなる「砂の彫刻世界選手権大会」を開催。世界のトッ



和紙の明かりで幻想的な世界が醸し出される「美濃和紙あかりアート展」(美濃市)

和紙の明かりで幻想的な世界が醸し出される「美濃和紙あかりアート展」(美濃市) 多くの市民が共有してあります。過

### 市民の協力・理解が成功のカギ

プアーティストの手で制作された繊細で芸術性の高い作品は見る人に感動を与えました。このように、毎年進化を遂げながら、今や九州を代表するゴールデンウィークのイベントに成長しています。

加世田青年会議所の発案でスタートした事業ということもあり、美濃市と同様に、当初から市民が主体的に参画。現在でも、約100名の市民が実施本部に加わり、イベントの企画・運営に携わっています。

細川 いずれの都市も市民がイベントに深く関与しているところに特徴がありますね。市民の協力・理解をいかに得るかが成功のポイントのように思いますが、どのような工夫をされていますか。

和田 小松市は、歌舞伎のほかに、華道、茶道、

市民参加を促すためにも、  
イベントなどは  
市民主導が鉄則。  
行政は後ろから支えるという  
スタンスが重要になってきます。



武藤 鉄弘  
美濃市長(岐阜県)

去の歴史に助けられている面があるかもしれないが、行政から特に働き掛けずとも、多くの市民が積極的に参画してくれています。

武藤 美濃市には、毎年4月に行われる伝統的な祭りの中で「花みこし」がつくられます。「しな」と呼ばれる竹に和紙の花をつけたみこしが市内を練りまわるものですが、その和紙の花自体もすべて市民の手づくりによるものです。しかも、町内によっては全世帯に花の作成を割り

当てるなど、みんなで祭りを盛り上げようという意識が徹底されています。

自転車レース「ツアー・オブ・ジャパン」も、やはりほとんどの世帯が清掃活動に携わっています。レース中は一般道路を全面通行止めにする事から、市民の生活に支障をきたしたり、工場の搬入もストップしたり、経済活動にも影響が出ますが、多くの市民の理解のもと、効果的にイベントが行われています。

小林 八戸市は、近年のアートイベントだけでなく、「三社大祭」や「八戸えんぶり」など、伝統的な祭りも大事にしてきたまちです。八戸の祭りは、すべて住民たちがそれぞれ役割を担いながら、主体的に運営されるところに特徴があります。実際、こうした機会ではぐくまれた地域の結束や人間関係の結びつきは、災害時の避難所運営などでも強い力を発揮することを、私たちも東日本大震災の被災で経験しました。

本坊 南さつま市の高齢化率は37%と、少子化・過疎化が進む中、どうしても行政への依存度が高くなりがちです。南さつま市では鹿児島弁の「じゃつど！すつど！きばつど」(そうだしやろう！がんばろう！)をモットーに、「自分たちでできることは自らの力でやろう」という意識の共有を図っています。吹上浜砂の祭典においても、会場に並べられたフラワーポットの管理などは、公民館単位で住民自ら積極的に取り組んでいます。

### 公共的な観点から、 文化政策をとらえ直す

細川 近年は「市民協働」がまちづくりのキーワードになっていますが、文化政策において



本坊 輝雄  
南さつま市長(鹿児島県)

「じゃっど! すっど! きばっど!  
(そうだ! やろう! がんばろう!)を  
モットーに、市民主体の  
文化活動を展開しています。

も、この市民協働が十分に機能しているというわけですね。  
**和田** まったくその通りです。小松市では、市民の幸せにつながるような公益的な事業を、いかにして市民同士、あるいは産学公民一体でつくりあげていくかを観点に、従来の「市民協働」から一歩進めて、「市民共創」「ふるさと共創」の浸透に取り組んでいます。現に、近年は、地域



住民の自主運営大運動会や、年末恒例の第九コンサートなど、市民主導の事業が活発に行われています。  
**小林** 公共、公益という視点は非常に重要ですね。八戸市では、「はっち」は指定管理者などを置かず、あくまでも直営を貫いています。それは公共的な役割という観点を重視しているからです。市民がアイデアを出し合いながら、文化活動を行う

う中で、八戸にはいかに貴重な地域資源があるか、魅力的な人間がいるかということを理解していただく。そして、八戸に誇りを感じていただき、最終的には、まちなか全体の活性化につなげていく。そういう写真を描いていたのですが、開館から5年が経過する中で、相当な手応えを感じています。確かに、当初は行政主導が強かった面もありましたが、今では市民が自主的に新しい活動を次々と進めています。

**武藤** 市民参加を促進するためには、あくまでも市民主導で、行政は後ろから支えるというスタンスが重要だと思います。美濃市では昭和63年に竹下内閣が進めたふるさと創生事業の1億円で基金を設けて、市民の提案事業に助成する仕組みをつくりました。これに加えて郷土史の発刊など地域のつながりを深める事業を行う場合も助成することとし、それが今では地域の絆

づくり事業として完全に定着し、行政は市民提案の事業を尊重し、サポートするという風土が出来上がっています。

**本坊** せっかくイベントを行うのですから、地域活性化という観点が大切ですね。吹上浜砂の祭典においても、かつてはゴールデンウィークに開催していましたが、この時期は交通費・ホテル代も高く、エージェンツとしても商品開発が難しい状況になりました。さらに、大きな需要が見込める修学旅行は、ゴールデンウィークが終わってから本格化します。そこで、一昨年からイベント期間を5月1日から1カ月間に延ばしたほか、地元でも6次産業化でお土産品を開発するなど、産業おこしと交流人口の拡大に努めています。

**和田** 地域自体に活力がないと、文化を維持することはできません。小松市が代々にわたって、地域文化を継承してきたのも強い産業があつてこそです。その意味でも、経済の活性化は重要です。

また、地域の文化や伝統芸能は、子どもたちの教育にもつながります。小松市では、一般的な「知徳体」ではなく、勧進帳のストーリーに



日本初の砂の彫刻展としてスタートした「吹上浜砂の祭典」(南さつま市)



細川 珠生  
政治ジャーナリスト

ちなみに、「智仁勇」を理念に据えた教育、人づくりに取り組んでいます。その考え方は、親御さんや地域の方にも幅広く浸透しています。時折、自分が演じた子供歌舞伎をわが子にも体験させたいと、県外から転校させるファミリーまでいらつしやいますよ。

**本坊** 南さつま市でも、まちの資源である砂文化を体感してもらおうと、吹上浜砂の祭典には幼稚園・保育園のゴミ袋を活用した手づくりこのほりを会場に飾ったり、幼い頃から砂遊びを通じて関心を持っていただき、各学校の砂場で腕を磨き、小学生や中学生が砂像選手権に出場するなど、市民参加型のイベントに取り組んでいます。

### 課題解決に向けた国への要望

**細川** それでは、最後に現段階の課題や国への要望をお聞かせください。

**本坊** 今や、あらゆる自治体が、自分たちの地域の宝を探して、それに磨きをかけようと懸命に取り組んでいます。南さつま市でも、故郷の素晴らしさを次世代に伝えていかないと、地域が衰退してしまうとの危機感を持ち、まちづくりを進めているところです。国にも、地方の挑戦・現場の目線を大切に、私たちと向き合ってもら

いたい。それぞれの地域での自主的、先駆的な取り組みを力強く支援してほしいと思います。

**武藤** 文化振興を活性化に結び付けるためにも、おもてなしの意識を高める必要があります。現に、美濃市には台湾をはじめ、海外からのツアー客が多くなりましたが、受け入れ態勢に課題を抱えています。言葉が通じないという点がネックなのか、商売をされている方の中に、海外からの観光客を避けようとする意識が感じられます。もう少し、市を挙げておもてなしの意識を高めていきたいと考えています。

また、ユネスコ無形文化遺産登録以後、手すき和紙に注目が集まり、需要が拡大していることから、国産の原材料の調達が難しくなっています。国へは、地域文化の維持・保全・振興という観点からの支援や原材料産地の育成に係る支援をお願いしたいと思います。

**小林** 国にお願いしたいのは、子育てや医療など、ナショナルミニマムに基づいた制度の構築です。現状では、日本全国どこに暮らしても同じような条件で安心して生活できる仕組みがないために、近隣の自治体と無用な競争が起きてしまっています。こうした現状を改善してもらえれば、後は特段の要望はありません。むしろ、まちの魅力づくりや文化振興などは、個々の自治体に任せてもらいたいと思います。

**和田** 近年は後継者や指導者の高齢化など、全国共通の課題を抱えています。さらに、スポーツをはじめ、子どもたちの活動が多岐にわたっている中で、どのように和の文化を振興させていくかという問題もあります。そうした観点から、全国の歌舞伎文化全体の浮上を目指して「全国子供歌舞伎フェスティバル in 小松」を開催し



てきました。いま、地方と呼ばれるところが日本文化の真の発祥地なので、国において地域文化の振興に一層の支援をお願いしたい。

**細川** 何世代にもわたってはぐくまれた地域文化を後世に継承し、かつ盛り立てていくためには、幅広い市民の参画が欠かせません。本日、お話を聞きまして、いずれの都市も、市民が主体的に活動できる仕組みを構築されていることが分かりました。これはまちづくりにおいても、重要な視点だと思えます。

今後も地域の貴重な資源を存分に活用しながら、官民一体となって、その都市ならではの文化振興に努めていただきたいと思います。

本日はありがとうございます。

(平成28年7月12日、全国都市会館にて開催)

本コーナーは隔月掲載となります。次回は11月号に掲載予定です。

